

Title	中山間地域のホームガーデンと地域活性化策から捉える地域形成の変化：石川県白山ろく地域の暮らしびりと栽培植物の利活用の視点から
Author(s)	西村, 俊
Citation	環境教育学研究, 23: 71-87
Issue Date	2014
Type	Research Paper
Text version	publ isher
URL	http://hdl.handle.net/10119/12135
Rights	本著作物は東京学芸大学環境教育研究センターの許可のもとに掲載するものです。西村俊, 環境教育学研究, 23, 2014, pp.71-87.
Description	

原著論文

中山間地域のホームガーデンと地域活性化策から
捉える地域形成の変化
—石川県白山ろく地域の暮らしぶりと栽培植物の利活用の視点から—

西村 俊

北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス研究科

**Alteration of Local Community Assembly from a Viewpoint of Home Garden
and Local Revitalization Movement in the Hilly and Mountainous Area**

Shun Nishimura

School of Materials Science,

Japan Advanced Institute of Science and Technology (JAIST)

Local community assembly and cultivation of plants have interacted in diverse ways in the long history of humankind. Researches in the hilly and mountainous areas about the alteration of human mind for cultivation of plants in home garden suggested that those relationships are gradually changing with increasing the concern on depopulation and aging society. The local revitalization movements based on utilization of cultivated plants in home garden are attributed to both realization of vital local communities and biocultural diversity in the local society. Further cross-fertilization between city and mountain villages may lead to propose the new way for sustainable community assembly toward next generations.

Key Words: local human society, plant cultivation, sustainability

I. 調査対象地域の特徴と目的

石川県白山市は、平成17年2月に1市2町5村（松任市、美川町、鶴来町、河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村）の合併により誕生し、今年2013年に合併から8年を迎えた自治体である（図1）（白山市HP）。市内には手取川（延長72 km）

が流れ、源流域・山間部の白峰から中流域の鳥越・吉野谷を経て、河口域・都市部の美川に至るまでの多様な自然環境・生活習慣を1つの自治体内に有している。河口域から車にて1時間程度で中流域へ、2時間程度で源流域へアクセスが可能である。本調査の対象地域である「白山ろく」は、旧河内村、鳥越村、吉野谷村、尾口村、白峰村の5村が位置する中山間地域を指す。

白山市の人口は、平成25年度8月末現在では11万3千人であり、各地域別人口は(白山市2013)、松任地域が70,656人(全体の62.5%)、美川地域が13,175人(11.7%)、鶴来地域が22,670人(20.1%)、河内地域が1,094人(1.0%)、鳥越地域が2,804人(2.5%)、吉野谷地域が1,104人(1.0%)、尾口地域が559人(0.5%)、白峰地域が939人(0.8%)であり、白山ろく5地域では6,500人(5.8%)を占める。白山ろく地域のここ12年間の年度末における人口動向を図2に示す(白山市2001-2013)。白山ろく人口はこの12年間で8,004人から6,665人へ1,339人(16.7%)減少し、さらにその減少傾向は徐々に“加速”している。2012年末の65歳以上の高齢者割合は34.4%、未成年者の人口割合は14.9%である(白山市2012)。

ここでは、白山ろくで個人が栽培する栽培品種の聞き取り調査から、その暮らしぶりの変化や栽培植物の利活用に関する動向を捉え、現在の中山間地域社会の変容と栽培植物の利活用について考察し、地域形成と生物文化多様性保全の今後の動向について議論したい。聞き取り調査は、白山ろくの平野部に位置する鳥越地域および吉野谷地域を中心に実施した。不特定の一般個人を聞き取り対象とすることで、日常生活におけるホームガーデンの役割や栽培植物との関わりを捉えることを目指した。また、地元の交流会等に参加することで、ホームガーデン調査だけでは聞き取りきれない、地域活動の中核を担う方々の意見や活動状況に関する情報収集・反映にも努めた。

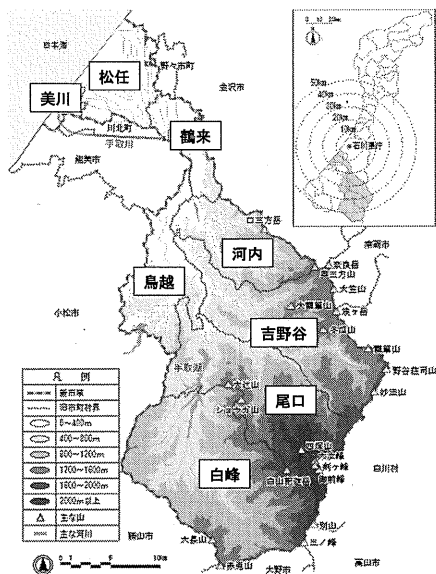


図1 白山市の位置図

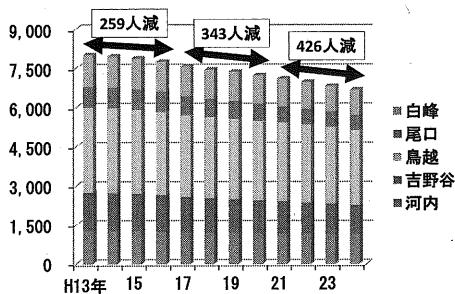


図2 白山ろく地域の人口動態

II. ホームガーデンに関する聞き取り調査および実踏調査の結果

1. 栽培作物の種類と自家採種の状況

表1に白山ろくで調査中に確認されたホームガーデンにおける栽培植物の一覧を示す。栽培作物としては、トウモロコシ、枝豆、ホウレン草をはじめ、一般的な作物の栽培が多く、種子に関しても農協や地元スーパーから購入し、播種されているものが多かった。

自家採種する理由としては、「味の好みがあるから、美味しいから」(旧鳥越村上野、旧鳥越村下吉谷、旧鳥越村上野)、「ネギ坊主や豆のサヤからは採種しやすい、昔からよく作っていてなじみがあるから」(旧鳥越村下吉谷、旧鳥越村若原)、「安全・安心だから」(旧吉野谷村木滑、旧吉野谷村上吉野)という声があった。

種子を購入する理由としては、「裏のラベルに、イタリア、オランダ、イギリス、トルコ産など外国名が表記されている、播いてみたらちゃんと育つ」(旧鳥越村下

吉谷)、「種を取って翌年播いてみても味が落ちる」(旧鳥越村下吉谷)という意見や、「種を改良している人の雇用を守るため」(旧吉野谷村上吉野)という地域の雇用維持を意識した購入行動という意見もあった。

表1 栽培作物と自家採種の聞き取り結果(春・夏季の白山ろく)

自家採種	栽培作物
する	菜種(ふきだち)、えんどう豆、長ネギ、イチゴ(苗)
しない	サツマイモ、トマト、ジャガイモ(馬鈴薯)、玉ねぎ、小松菜、トウモロコシ、インゲン、オクラ、枝豆、ホウレン草、アスパラガス、カボチャ、キャベツ(カンラン)、ナス、ピーマン、トマト、大葉(青しそ)、花(墓参りのお供え用など)、里芋、西瓜、ブロッコリー、タラの芽、きゅうり 米(コシヒカリ)、れんこん、そば

比較的規模の大きい栽培作物としては、米(コシヒカリ)、れんこん、そばがあり、米は主に縁故米として自家消費・贈呈されており、農場経営者により販売されているものもある。そばは、新そば祭り等のイベントで使用されているが、地域の年間消費が賄える耕作面積ではない。れんこんの販路等についての聞き取りはできなかったが、1か所の栽培面積は田んぼ1枚ほどと大きく、栽培場所は平野部(旧鳥越村三坂、旧鳥越村河合)や山間部(旧鳥越村柳原)に点在していた。

栽培植物に関連する文化としては、春先に出た菜種の若葉(ふきだち;春先に吹き出る様から命名されたのではないかという話)を漬物、汁物、炒めものとして食す習慣があり、「春の訪れを知らせる植物」として親しまれている(旧鳥越村下吉谷、旧鳥越村若原など)。葉を食べた後に自家採種し、秋に再度植えていた。

白山ろくでは、かつて雑穀(ヒエ、キビ、アワなど)の栽培が盛んに行われていたが(白山ろく旧5村史)、今では、その栽培風景をほとんど目にはできない。調査期間中に確認された雑穀栽培の状況について、表2にまとめる。いずれも小規模ではあるが、タカキビ、キビ、ヒエ、アワの栽培を確認した。栽培の理由として、「好きなキビモチ搗きのため」(旧鳥越村三坂Iさん)、「長年この地域で受け継がれた在来品種を残していきたいので(白峰Yさん)」というように、かつての『重

要な栄養源として地域で継承・栽培されてきた姿』から、『個人の趣向や想いにより継承・栽培される姿』へと変わってきているようだった。また、公的機関である白山ろく民俗資料館では、雑穀の栽培と共に収穫物をイベントに利用するなどされている（後述する）。

表2 白山麓での作付けを確認した雑穀（2013年夏）

雑穀	場所	面積（おおよそ）
タカキビ（モロコシ）	旧鳥越村三坂、Iさん	8 m ² × 1か所
キビ	木滑の国道157沿い	8 m ² × 2か所 24 m ² × 1か所
タカキビ（モロコシ）	上吉野のバス停裏	12 m ² × 1か所
ヒエ、モチアワ、ウルチアワ （いずれも在来品種）	白峰、Yさん	不明
アワ	白峰、白山ろく民族資料館	不明

2. 耕作面積

耕作地としては、休耕田の利用、家の庭先、区画整理された農地が確認でき、1か所辺りおおよそ 200~400 m² 程度とかなり大きい耕作面積である。また、いずれの田畑も私有地だった（図3）。

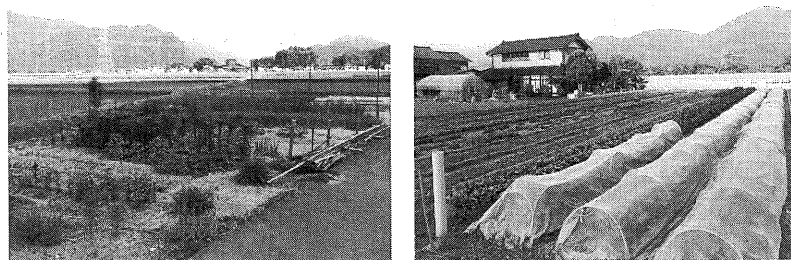


図3 平野部における休耕田利用（左）と庭先（右）のホームガーデン（鳥越上野）

3. 鳥獣害対策

クマ、ホエジカ、サル（集団）、ハクビシン、イノシシ、タヌキ、エゾジカ、テン

など、中山間地域に位置する白山ろくでは野生動物の目撃例が多く、山間部へ進むにつれて、田畑の様子も大きく変化する。図3に示したように、平野部では開かれた農地が多いのに対し、段々と山間部へ進むにつれて図4のような四方をトタンや鉄格子で囲った、さらには上部を含む周囲を網で覆った（上部は主にサル対策）ホームガーデンを目にすることが多くなる。人々に話を伺うと、「人間が檻の中に入って作業をするので、動物園の逆のようだ」（旧鳥越村河原山）と述べる人や、「サルが取りこぼしたものを人間が収穫してくる」（旧鳥越村河原山）と鳥獣害の深刻さを表現する人もいた。山間に進むにつれて、自然環境（豪雪など）と共に鳥獣害も厳しくなり、農耕離れ（耕作放棄地の増加）や人口流出（地域の荒廃）の要因の一つとなっている。

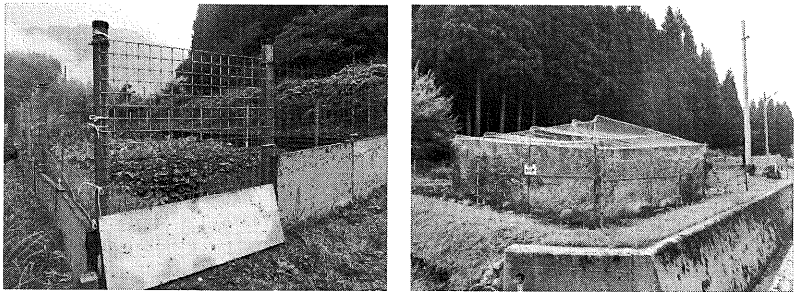


図4 山間部における鳥獣被害対策（左；白山市数瀬町、右；白山市柳原町）

4. ホームガーデンおよび地域観に対する世代間の意識変化

白山ろくでの栽培作物の種類や種の購入に関するホームガーデンにおける調査結果を踏まえると、栽培面積は都市部の賃貸型市民農園よりも格段に大きいものの、『楽しみや余暇』という都市部の市民農園と類似の役割を担っている様子が見られた。ここで、自家栽培やコミュニティーガーデンに対する意識、また市町村統廃合に対する今後の地域観に関する意識について、下記にまとめる。

75～85歳；ホームガーデンで作業をしている姿をよく目にする世代であり、産まれてからずっとその地域に住み、近隣同士（隣の地区など）で結婚した夫婦も多い。自家用・親族／親類への贈呈用として、作りたいものを栽培している。「販売しない方が気楽でいい」、「スーパーで購入するよりも自分で栽培した野菜の方がおいしい」

という声もあり、『余暇・楽しみとしての農』という印象が強い。町村合併に関しては、「これまでよりも将来は段々と生活が不便になって行くだろう」という危惧を持っていた。

55～65歳；地域の中心的な役割を担っている世代であり、本業の職業と先祖代々の土地の耕作の両立をしている。産まれてからずっとその地域に住む。『余暇・楽しみの一環としての農』という声がある一方で、『販売・地域活性化への活用が出来る素材としての農』（地域における雇用創出）という意識もあり、地域の物産や食材を活かした地産地消・ブランド化を考案・展開も行っている。合併については、「これまでにない周囲の旧村間との連携による地域の活性化策を検討・実践して行きたい」という意識も持っていた。

また、どちらの世代においても、地域の過疎高齢化・人口流出に伴う地域社会の荒廃、コミュニティや田畑の維持に対する不安の思いを感じ取ることができた。「畑を辞めたら、草が生えてみつももない、使いたい時に使えなくなってしまう」という意見からも、「山村で培われた協働意識」を継続することで、集落の荒廃を何とか食い止めているという現状が伝わり、『田畑の耕作、利用』と『地域形成の維持』の関連性を強く感じた。合併に関しては、統合によって協力して地域を築く必要性を理解しながらも、これまで切磋琢磨・競い合ってきた周辺自治体と直ぐに手を取り合って協働していけるわけではないというジレンマもある様子だった。

5. 公的機関による文化および種の保存と伝承

白山ろくの白峰地域には、石川県立白山ろく民俗資料館があり、かつて白山ろく各地で営まれていた出作り・焼畑文化（橘 1995、白山ろく旧5村史）や養蚕の展示、移築保存された古民家を見学することが出来る。焼畑、トチ・アワ餅搗き、シコクビエの脱穀（穂がち）など、地域の文化・風習の体験イベントも活発に行われている（図5）。農家が畑で栽培して種継ぎをする現地保存方法では進化過程は継続するのに対し、大学や研究機関が地域の農家などから収集して種子貯蔵庫（遺伝子銀行）に保存し、時々栽培して種継ぎをする系統保存方法では、貯蔵し始めた時点から栽培植物としての進化が止まってしまう（木俣・井村 2008）。白山ろく民俗資料館で

は、展示や講演といった歴史資料の継承だけではなく、実際に体験する活動を積極的に取り入れることで、イベントに利用する在来品種（シコクビエやアワ）の現地栽培・進化の継続を実現している。また、体験イベントに地域に住む経験豊富な先人や研究者を招くことで、次世代への技の継承の場としても活かされていた。規模は大きくはないが、地域に受け継がれる伝統智を体験や協働によって種と共に後世に受け継ぐ媒体として、公的機関の新たな可能性を感じることができた。エコミュージアム日本村「植物と人々の博物館」（山梨県小菅村）の活動に関する調査でも山村の人々と都市民と大学などの新しい協働による雑穀在来品種の現地保存の持続可能性が報告されており（木俣・井村 2008）、栽培作物の利活用を続けながら系統を現地保存する仕組みを組織として継続することが、伝統智・種子の継承に効果的な手法の一つであると考えられる。

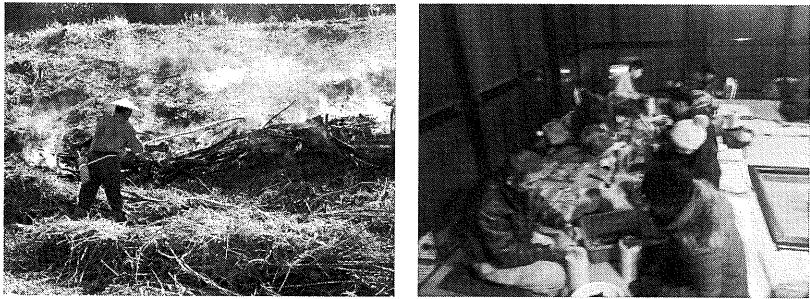


図5 民族資料館主催のイベント風景（左；焼畑、右；トチのみ割り）

Ⅲ. 食文化を活かした地域発信型の地域活性化

地域形成の維持が難しくなっていく状況下では、地域に継承されてきた伝統文化や種子の継承もまた難しい局面に立たされている。ここでは、「地域形成」と「種子の継承」の関連性の動向を捉えることから、今後の地域社会と栽培植物の利活用について体系を整理・考察する足掛かりとしたい。特に、現在地域で展開されている食文化を活かした地域活性化策について報告する。

1. 白山ろく白峰地区のカマシ

白山ろくの白峰では、“カマシ”を用いた伝統食が食されてきた。カマシとは、鴨

の足に似た穂を持つ「シコクビエ」の事を指す。雑穀であるカマシは山間部でも育てやすく、脱穀後も目減りせず、長期保存が可能で栄養価が高いことから、白峰の重要な栄養源として重宝されてきた。カマシの炒った粉「かましりこ」を熱湯や汁で掻いたり（図6）、もちや団子に加工して伝統的な中間食（おやつ）として食されてきた。現在では、古民家を利用した「雪だるまカフェ」（図6）において、伝統食である「おろしうどん」や名産の「ぼたもち」と共に提供されている。また、「かましくッキー」や「かましせんべい」といった新商品も物産館で販売されており、観光資源として活用することで、賑わいの創出、伝統食の継承、シコクビエの栽培による進化の継続に繋がっている。

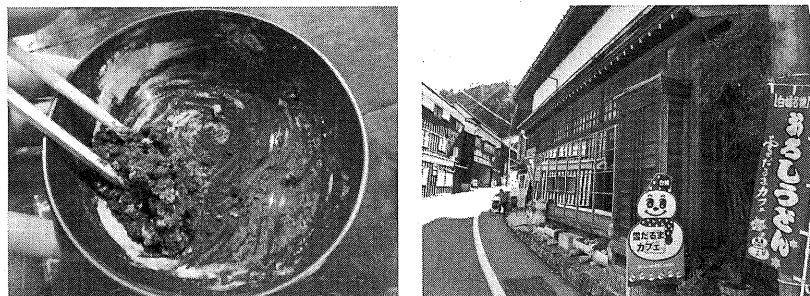


図6 かましりこを湯で掻いたもの（左）と雪だるまカフェ（右）

2. 白山ブランド

「白山ろくの売りは『人材』と『食』である」、地域に住み続けてきた人々がたどり着いた地域の方の源。現在、地域の食材と人の繋がりを活かして展開を進めているのが「白山ブランド」の創出である。堅豆腐は、日本のいくつかの地域で伝統食として今も受け継がれており、石川県白峰は全国的にも有数の堅豆腐文化を持つ地域である。近年、その堅豆腐の新しい調理方法として考案されたのが「白山堅豆腐カレー（レトルト）」である。伝統的な食材をより身近な商品として新商品化し、現在では約3万食を販売するヒット商品となっている。この白山堅豆腐カレーの成功は、地域の雇用創出、白山文化の宣伝にもつながる他、今後、原材料の大豆の地産地消化に取り組むことで耕作放棄地の解消にもつながるのではないかと期待されている（図7）。この他にも、白山米粉、白山名人なめこ、白山モンブラン、白山百膳など、様々な食材の発信による『白山ブランド』の創出が展開されている（西村 2012）。

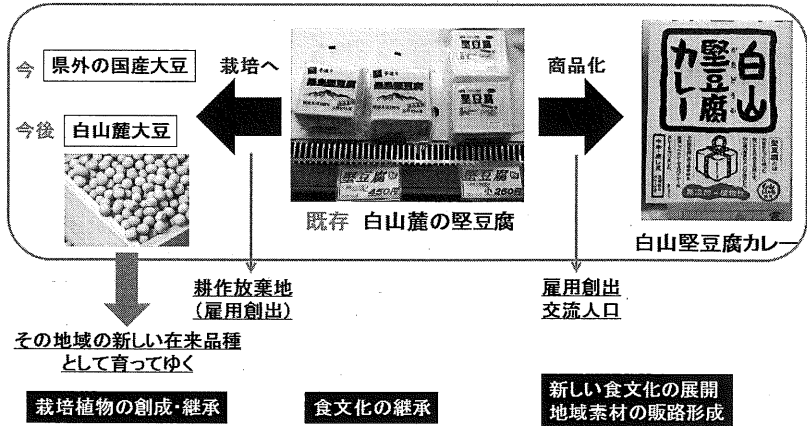


図7 堅・固豆腐から広がる地域・文化の再形成の展開

3. 石川県内での事例 -加賀野菜のブランド化-

石川県の代表的な在来品種には、源助ダイコン、金沢青カブ、中島菜、加賀太キュウリ、金時草、五郎島さつまいも、加賀れんこん、ヘタ紫なす、打木赤皮甘栗かぼちゃ、諸江せり、二塚からしな、つる豆、金沢一本太ねぎなどがある（大江 2002）。これらの伝統野菜の一部は、現在『加賀野菜』と認定され（平成9年から選定が始まり、現在は15品目が認定されている）、近年、販売店や飲食店で積極的に宣伝・提供されるようになってきている（図8）。県内の大手量販店で販売されるほか、県内の旅館やホテル、飲食店で提供される食事に積極的に活用されている（図9）。特色ある地域性の発信、また在来品種の販路拡大に伴う栽培環境の維持、愛着の創出・継承に在来品種が効果的に活かされている事例である。



図8 加賀野菜の普及啓発・宣伝ポスター

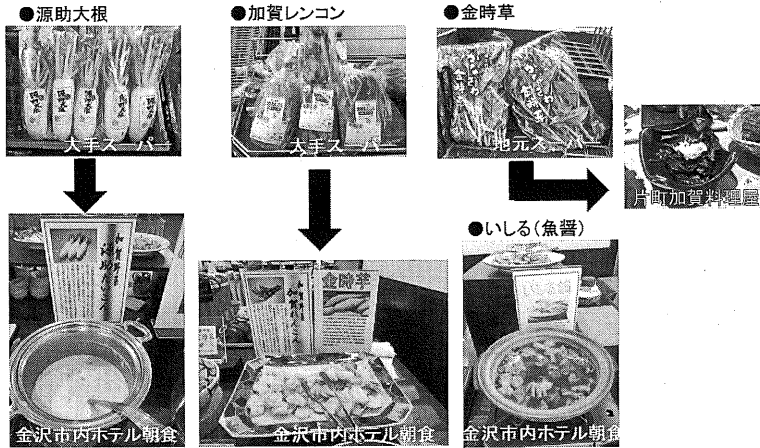


図9 加賀野菜の販売と観光資源としての利活用

この他にも、奥能登の棚田で生産された『能登棚田米』、羽咋市御子原地区で栽培されローマ法王献上米として有名となった『御子原米』、フリージアを県が独自に改良して育成した『エアリーフローラ』、石川県発のブドウの新品種『ルビーロマン』など、多品種少量生産である石川県の農業作物、畜産・加工品の市場競争力向上を目的としたブランド化が県を挙げて進められている（石川県広報 2013）。本学が位置する能美市でも、100年前から栽培が始められた『加賀丸いも』を用いた新商品の開発（焼酎、ごはんば〜が、ブレンド茶、お好み焼き（のみまる）、コロッケなど）や植えつけ体験授業を通じた普及、作付拡大および後継者の育成が進められている（能美市広報 2013）。

4. 北陸地域での事例 -福井県池田町「こっぽや」-

ホームガーデンにより栽培された野菜の集配・販売体系を構築することで地域社会基盤の再構築を成し遂げた北陸の事例では、福井県池田町のアンテナショップ『こっぽや』事業が挙げられる。人口 3,023 人、1,040 世帯（2013 年 8 月現在）、少子高齢化と財政難の状況にある福井県池田町は、池田町のホームガーデンでその朝収穫された野菜や旬の食材を出荷場に集め、近郊都市である福井市のショッピングセンターの一角に構えた池田町のアンテナショップ『こっぽや』で販売するシステムを

構築したことで、年間1億3千万円の収入を達成した（日本テレビ 2013）。高齢者が多いという特徴を逆転の発想で活かし、それまでに地域に蓄えられてきたお年寄りのノウハウを活かした野菜作り、コンニャク作り、生ごみ堆肥の製品化やブランド米「うららの米」の生産などへと繋げたことで、地域の活力と地域の新たな持続可能性を創成している。地域の宝を都市部の住人へ発信する体制の構築が、地域経済の基盤形成に強く結びついていることを感じさせる事例である。

IV. 中山間地における暮らしぶりと栽培植物を活かした地域活性化策の関連

上述してきたように、町村合併や過疎高齢化に伴う地域再編成が進む中で、地域の新たな基盤作りのための栽培植物の利活用（ブランド化）や、伝統品種の継承のための新たな利活用法の考案といった活動が盛んに行われている。ここでは、地域形成と栽培作物との関連性の変化について考察する。

これまでの地域形成と栽培植物の利活用についての関連を図10に表した。地を耕して作物を育てることで形成されてきた食文化や地域社会（農耕文化基本複合（中尾 1966、木俣 2004）、さらに時代のニーズに合わせて産業利用できる植物の栽培により、地域形成が安定的に築かれ維持されてきた中山間地域の社会構造の中で、在来品種が受け継がれ独自の進化を続けるとともに、地域社会も維持されてきた。前記の菜種（ふきだち）は、春を感じる食文化としてその種が継承され、地域の一体感を今に伝える栽培作物の一つである。また、白山ろくの平野部では、主要な産業用栽培作物が、桑（養蚕）、大麻→花卉、葉煙草→鳥越南瓜、キャベツ（かんらん）→手取ほうれんそう、と時代のニーズに沿って変遷を経ながら、地場産業を築き、地域形成を支えていた（白山ろく旧5村史）。

現在の地域形成と栽培植物の利活用の関連を図11に表した。過疎高齢化が進み地域形成の課題が徐々に深刻化している中山間地域では、『産業としての農業』から『生活農業』への転換が進み、『個の楽しみ』としての栽培と食文化という側面が強まってきた。また、地場産業や地域力の低下という課題の中で、これまでに培われてきた食文化や栽培植物を基盤とした『地域ブランド』の創生や、新しい地場産業（雇用）の形成を促す活動からの地域社会の維持もしくは再形成が始まっている。

白山ろくでは、上述の『白山ブランド』による地域の栽培作物のブランド化の他、

白山スーパー林道ウォーク、『白山きりまんじゅう』COFFEE を白山で飲もう！事業、白山・白川郷 100kmウルトラマラソン等のイベントによる交流人口の増加による情報発信も積極的に行っている。こうした活動の多くが、近郊の都市部へ向けた活動である(図12)。これは、従来は居住住人同士の貨幣流通により形成された比較的小さな市場が、地域の持続可能性或いはその地域に受け継がれる在来植物の栽培にある貢献してきたが、居住地域の地域力が弱まる中で、より地域外からの“外貨”を得る方策を講じる必要が増してきているためであると考えられる。従って、近郊の都市部へどのような方法で情報と商品を発信してゆけるのかが、白山ろく地域に継承されている植物と人々の文化(生物文化多様性)を次世代へ維持・継承するカギとなってきたと言える。すなわち、こうした地域活性化活動の中で、栽培植物の販路の構築や利活用策を促進することが、今後の在来品種の継承と地域社会の維持の双方に重要な要素となっている(図13)。

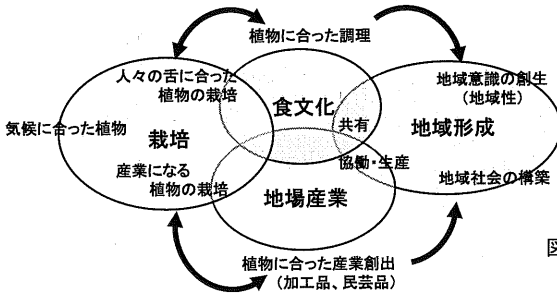


図10 これまでの栽培植物と地域形成の関連モデル図

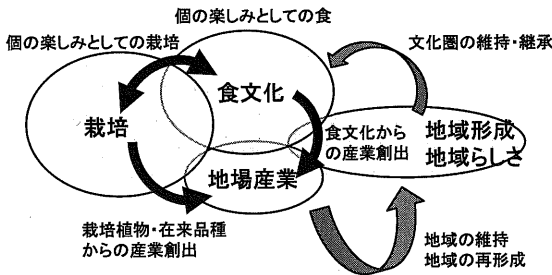


図11 現在の栽培植物と地域形成の関連モデル図

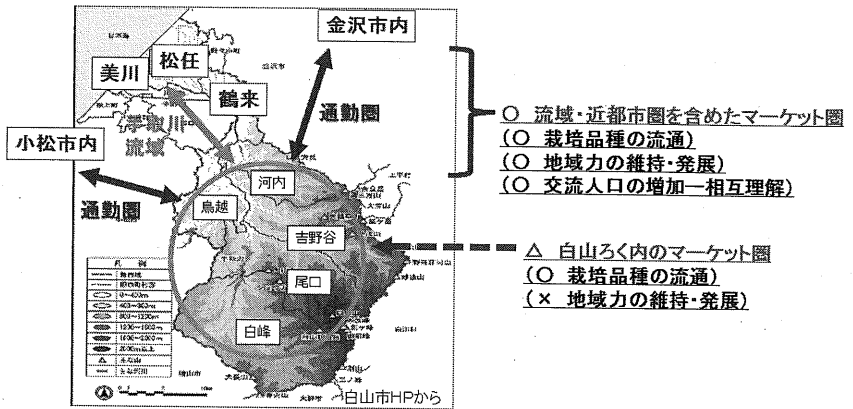
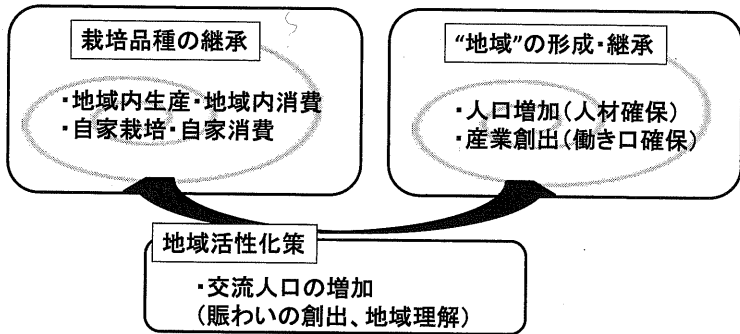


図12 白山ろくから捉えたマーケット圏

地域の再構築(課題→活用)と栽培品種の販路の形成



～相互的な活性効果による維持・継承～

図13 栽培植物の利活用が紡ぐ植物と人の継承の関連

V. 終わりに

日本の山村の過疎高齢化はますます深刻化し、今後10年で423もの集落が減少すると試算されている(梶井 2008)。昭和35年ごろからはじまる日本の経済成長政策が日本各地の農林業人口を都市部に集中させた結果、日本各地のムラを崩壊させ(今井 1968、森井 1995)、このような農山村の過疎化現象により、耕土の荒廃、山

地帯や里山の生態系の脆弱化が進んできた（林・佐川 2009）とも言われている。合理化にむけた町村合併、空き家や廃施設の増加など、現在の農山村の窮地はここ何十年も警鐘されてはいるが、実際の農山村での暮らしぶりは、持続可能性と自然・文化との調和のとれた生物文化多様性を有する営みを脈々と続けているのではないだろうか。一方、都市部での経済価値に基づく大量消費型の生活は、衣食住等の様々な過程において他所（他者、他国など）に大きく依存しており、政治や経済状況、自然災害などによりその暮らしぶりが著しく影響を受け続けている。

東日本大震災以降、都市形成基盤の危うさに関して議論される機会も多く、両者の対比は関心の高いテーマの一つとなってきた。『農山村において育まれてきた持続可能な暮らしぶり、そして資本主義の導入により成り立たなくなってきた地域形成の現状と課題』と『都市における資本主義の中核としての発展の基にある不安定な営み』。それぞれの地域に住む人々の営みにより形成されてきた社会の形であり、単純に両者を総括することも、比較することも実際には難しいことである。しかし、双方における今後の持続可能で安定な地域社会を維持・形成し続ける上では、それぞれの暮らしぶりを再評価した新たな地域形成への転換が求められているのではないだろうか。

近年では、農山村での営みを活かした生活スタイルを取り入れた社会（里山資本主義）の仕組みを、金銭授受を基盤にした社会（マネー資本主義）に取り入れる提案（藻谷・NHK 広島取材班 2013）や、都市部から農山部へのIターン・Uターン人口の増加現象、IT企業の農山村移転など、両者をつなぐ様々な動きが模索されている。また、来年度からは、休眠農地（耕作放棄地）の貸し出し促進のために、日本政府が主導して農地中間管理機構（仮称）を新設し、まとまった広さの農地を大規模農家や農業法人などへ貸し出す政策が検討されている（農林水産省）。都市型の生活様式と農山村の生活様式、両者の現状・課題を踏まえた、生物文化多様性の持続可能性策が問われ始めている。現在の『農山村から都市部への情報発信』という一方通行だけではなく、『都市部から農山村への学び』さらには『都市部』や『農山村』という敷居を越えた、地域の繋がりとバランスを意識した地域形成の広がりを目指したい。

石川県白山市は、前記のように同一自治体に源流域から河口域までの多様な自然環境・生活習慣をもつ自治体である。白山市の今後の活動や政策が、全国の一つの

モデルとなるように期待し、今後も注目して行きたいと思う。

謝辞

本調査研究の一部は、公益財団法人住友財団による2011年度環境研究助成に採択された「ホームガーデンによる生物文化多様性保全と家族食料安全保障」の活動の元で行われた。ここに謝意を表す。また、調査に際し、白山市行政職員の方、白山市ろく地域住人の方に、お忙しい中、意見聴取のご協力を頂きました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

参考文献等

- 林哲・佐川貴久, 2009, 「昭和28年の白峰村における郵便図 ―山々を歩いた郵便配達員―」,
『石川県白山自然センター研究報告』, 36 : 51-60.
- 今井幸彦編, 1968, 『日本の過疎地帯』, 岩波新書.
- 石川県, 2013, 広報誌『ほっと石川』, 春季号.
- 石川県白山市, 2001-2013, 『白山市統計書』.
- 石川県白山市 HP, 2013, 白山市の位置図.
- 石川県能美市, 2013, 『広報能美』, 102 (7月号).
- 梶井照陰, 2008, 『限界集落』, 有限会社フォイル.
- 河内村史編集委員会, 1981, 『河内村史 上巻』, 石川県河内村役場.
- 木俣美樹男・井村礼恵, 2002, 「ホーム・ガーデンによる雑穀の生物文化多様性保全 ―エコミュージアム日本村『植物と人々の博物館』づくりを通じて―」, 『エコミュージアム研究』,
13 : 34-42.
- 木俣美樹男, 2004, 「農耕文化基本複合をめぐる環境教育学の方法論」, 『環境教育』, 14(2) :
56-67.
- 森井淳吉, 1995, 『「高度成長」と農山村過疎』, 文理閣.
- 藻谷浩介・NHK 広島取材班, 2013, 『里山資本主義 ―日本経済は「安心の原理」で動く―』,
角川書店.
- 中尾佐助, 1966, 『栽培植物と農耕の起源』, 岩波書店.
- 日本テレビ, 2013, NNN ドキュメント『土からのごほうび ―合併にNO!と言った町―』.
- 西村俊, 2012, 「地域の再建を担う非地域住人による市民活動」, 『民族植物学ノオト』, 5 : 10-13.

- 西村俊, 2012, 「持続可能性を指向した中山間地域の活性化」, 『民族植物学ノオト』, 5 : 14-18.
- 尾口村史編纂専門委員会, 1978, 『石川県尾口村史 第一巻・資料編一』, 石川県石川郡尾口村役場.
- 尾口村史編纂専門委員会, 1979, 『石川県尾口村史 第二巻・資料編二』, 石川県石川郡尾口村役場.
- 尾口村史編纂専門委員会, 1981, 『石川県尾口村史 第一巻・通史編』, 石川県石川郡尾口村役場.
- 大江碩也, 2002, 『都道府県別 地方野菜大全』, 農山漁村文化協会, 134-142.
- 白峰村史編集委員会, 1982, 『白峰村史 上巻 (復刻版)』, 石川県白峰村役場.
- 白峰村史編集委員会, 1981, 『白峰村史 下巻 (復刻版)』, 石川県白峰村役場.
- 白峰村史編纂委員会, 1991, 『白峰村史 第3巻』, 石川県白峰村役場.
- 橘礼吉, 1995, 『白山麓の焼畑農耕 - その民俗学的生態誌 -』, 白水社.
- 鳥越史編纂委員会, 1972, 『石川県鳥越史』, 石川県石川郡鳥越村役場.
- 鳥越史編纂専門委員会, 2004, 『続鳥越村史「現代編」』, 石川県鳥越村.
- 鳥越史編纂専門委員会, 2004, 『続鳥越村史「図説編」』, 石川県鳥越村.
- 上山秀之, 1983, 『河内村史 下巻 (民俗編)』, 石川県河内村役場.
- 吉野谷村史編纂専門委員会, 2003, 『吉野谷村史 通史編』, 石川県吉野谷村.
- 吉野谷村史編纂専門委員会, 2003, 『吉野谷村史 通史編 (近現代) 補遺』, 石川県吉野谷村.
- 吉野谷村史編纂専門委員会, 2004, 『吉野谷村史 史料編 (前近代)』, 石川県吉野谷村.
- 吉野谷村史編纂専門委員会, 2004, 『吉野谷村史 自然生活文化集落編』, 石川県吉野谷村.
- 吉野谷村史編纂専門委員会, 2004, 『図説 吉野谷村の歴史』, 石川県吉野谷村.